

人留守宅相替候事無之 いたれも安全之様子ニ御座候  
已上

二七 〔天保五年〕正月一二日（別翰）

尚々 走筆乱書よめかね候処も可有之候 用事文談  
入組候間 失礼なからとく御熟覧の上 御心得ち  
かひ無之様いたし度奉存候

別翰致啓上候 餘寒強御座候処 弥御揃御安全可被成  
御超歳 重畳目出度奉存候 然は旧冬は俠客傳四集<sup>二</sup>う  
り出し延引之義ニ付 愚意申述候処 早速御返事被遣<sup>三</sup>  
且御趣意之趣 丁子屋平兵衛殿も同様 段々被申聞候  
趣致承知候 尤上方筋は正月二日迄ニうり出しニ不相  
替候てハ 捌方七八十口も減し候よし 御商ひの都合  
第一の事ニ候得は 今さら彼是可申様も無之 いたれ  
とも思召次第ニ御取斗被成候様奉存候 尤五集は先ッ  
八大傳九輯十冊稿し畢り候而 亦取かゝり可申候 且

二七 〔天保五年〕正月一二日

水滸後画傳も名古屋ニて水滸後傳通結いたし 出板之  
もくろミ有之よしニ付 丁子や何分はやく初編出し  
度よし被申入 左候へハ俠客傳五集はいよくおそな  
はり可申入 いたれ来春四集御うり出し後 引つゞき  
五集稿本ニ取かゝり候様いたし度心かけ申候 此段御  
承知可被下候 老拙追々老邁に及び 且悴年中病身ニ  
て 家事も手前一人ニて世話いたし候事故 萬事行届  
かね候 此段御遠察可被下候

一乍序申試候 去年中注文の書物類 書付を以幸便ニ御  
つみ下し被下候様 御たのミ申入 尚又丁平殿御地<sup>四</sup>に  
被参候節 くはしくたのミ遣し候処 其節の御状ニ丁  
平殿へ御談し置被成候よし 御申越し被成候へとも  
丁平殿被帰候て 今以その義何とも不被申候 尤注  
文之本一口も不被遣候 是は先達而申談候書籍直段之  
義ニ付 愚意申述候ニ付 思召ニ障り候て不被遣候事  
と察し申候 左候ハ、ケ様々とのわけ合故 注文之本  
ハ下さぬと一筆被仰越候へハ 其心得ニ罷在候へとも  
御承知之趣故 被遣候事と心得罷在候 既に去年中も

七三

大学衍義外は本有之よし申来候間 かひ入可申哉とも  
存候へとも 又御店は被遣候へハ 二重ニ成候故 そ  
の本かひとり不申候て 後悔いたし候 老拙は御頼申  
候本類ハ 不被遣候思召ニ候ハ、 已来其心得ニ可罷  
在候間 弥左様ニ候ハ、 此返事ニ御断之趣 可被仰  
越候 左様之義ニも無之候ハ、

一大学衍義外ニ諸国名義考 巻下

右大学衍義ハ 先達而代金式分式朱ト被仰越候 右之  
書巻下外ニ

一和蘭新譯地球全図

右両様当年船つミ幸便ニ被遣候様いたし度候 それと  
も前文之趣ニ候ハ、 強て御頼申候わけニハ無之候  
当地書林ニてたつね候て もし有合せ不申候とも 御  
地外之書林へ申遣し候ても 用事ハ并し可申候得とも  
たとへ御利分無之候とも 聊之品御たのミ申候ても取  
引不被成候思召ニ候ハ、 一向之他人ニハ劣り候事ニ  
候へハ 俠客傳水滸後画傳共 ほねを折候はり合も無  
之事ニ御座候 尤あたり前の潤筆御出し被成候上は

仔細も無之事ニ候へとも 此方とても校合其外ともニ  
定めの外之ほね折候上は かはりの御世話被成候とて  
も さのミ御用心ニもあるましき哉と存候 俠客傳ニ  
入用之写本 その外去年かひ入候本代 此節勘定いた  
し見候へハ 七両式分位費し候 外之作者ニかくのこ  
とく 先手を入候て骨を折候もの有之候哉 とくト御  
勘考可被成候 畢竟は末永くうれ候て 板元方の株板  
ニいたし度存候外無之処 乍失礼氣まつき被成候様ニ  
てハ さりとハく存候様ニも無之 ほね折かひも無  
之様ニ被存候間 心事覆蔵なく得御意候 あしからす  
御勘弁の上 いつれとも思召之趣 御返事ニ可被仰聞  
候 御断ニ候ハ、 本類注文已来決して御頼ミ申し  
く候 此義去年中々今以わかりかね候間 無拠申試候  
右可得貴意如此御座候 恐惶謹言

正月十二日

瀧澤篁民

河内屋

茂兵衛様